
闇に吞まれゆく、君の世界

けふこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇に吞まれゆく、君の世界

【Nコード】

N6689N

【作者名】

けふこ

【あらすじ】

闇を見つめる少女と、彼女に気付いた少年のお話。

いつものように、彼女は廊下を見つめていた。
出席番号が遅いから、彼女の席は必ず一番廊下に近い列になる。
ぼくはそれを何気なく見つめていて。

廊下を見ている彼女が、たまに心配になるのだった。

いつも、廊下を見ていた。

廊下の向こうの、もっと向こうの、壁より向こうの、闇。

真っ暗闇。

頭がぐるぐるして、とても気分が悪くなったときに、よく見るようになった。

自分のこの気持ち悪さとか、気分の悪さが正直に体に出るようになったのは、この高校に入ってからだ。中学の時までは、うまくやっていた。このぐちゃぐちゃした思いを、うまく隠せていた。自分に限りなく近い人たちが、多い高校だからだろう。きっと、そうだ。でも、毎日は変わらず憂鬱で、毎日が辛い。

辛くて、遠くを見つめて、いつの間にか闇に魅入られていた。魅せられていた。

目が離せなくなった。

遠くて近い、近くて届かない、その闇。

引き込まれたらどうなるだろう？

私はここから消えるだろうか。

消えることができるのだろうか。

そんな、危うい好奇心。そして、期待。

消えたい。

消えてしまいたい。

こんな自分、私は必要としていない。

友達には少ないようだけど、優しい人たちが彼女に声をかける。

彼女は、苦笑いしからない。不思議な子だった。

みんなに苦手意識を持っているみたいで、同じ部活動友達のぼくにも、クラスでは苦笑いをしてくる。

彼女は、クラスの人たちと距離を置いている。

何が原因でそうなっているのか、ぼくには分からない。彼女の歩んできた人生を、ぼくは半分も理解していないからだろう。

彼女は、いつだって気高くそこに座っていた。

ぼくは彼女を見る。

友達と話をしていた。けれど、友達のほうも何か用事があって話しかけたようで、すぐに彼女のもとを離れた。

彼女が、だれか一人とでも長く話をしているところを、見たことがない。

長くて、せいぜい30秒。

その間に、彼女との会話はなくなる。

ぼくも、そんなに執拗に話しかけはしないが、最長で20秒だった。彼女は、いつも苦笑いをしている。

いつも、いつも。笑える話も悲しむ話も、全部苦笑いをしている。

そうか、苦笑いってどんな感情の時でも活用できるものなんだなあ、って感心した。

感心したけど、辛かった。

彼女と話をしているのが辛い。

彼女のあの苦笑いが、こっちに来るなという境界線のようで、ぼくはそれ以上彼女に話しかけられないのだ。

あの、廊下のどこか暗い場所を探し求めているような、あの危うさを漂わせている。

だからぼくは、急に唇をつぐんでしまうのだ。

彼が私のことをよく見ていることなんか、知っていた。だけど、彼とは関わるべきではないと思った。

危ない。彼の目を見て話すのが怖かった。

彼は、私の本質を知っている。

どこかで察している。

あの廊下の向こうの闇も、きっと知っている。

だから、怖かったのだ。

私に関わらないで。

そうしなければ、私は。

私は。

ぐるぐるし始めた。

私は、気持ち悪い、はいてしまいそうだ。

すぐに体に現れる。

私にどうか触らないで。

私を一人にさせて、そうして忘れて。

この先も私の存在をどうか消して。

消して、消して、かき消して。

私を、あの闇に、閉じ込めて。

遠くを見つめる彼女の双眸。

彼女は、どうやら今日はひどく憂鬱な日だったらしかった。

彼女は、大丈夫だろうか。

ぼくは不安になった。

あの、廊下の暗い部分。

どこにも影などないのに、闇のような、どこからともなく腕が伸び

てきそうな、そんなところを見つめている。

そこに幽霊がいてもおかしくないような、そんな箇所ばかり彼女は見つめている。

ぼくは、彼女から目が離せない。

だって、彼女から目を離してしまったら、彼女がどこかに消えてしまうような気がしたから。

彼女が最近クラスから姿を消すようになった。

もちろん授業にはしっかりでている。遅刻だってしない。

けれど、必ず昼休みにはいない。

いつも一緒にお弁当を食べている友達は、気にしていないようにわいわいと自分たちのお弁当を食べている。

ぼくは不安になって、彼女を探すことにした。

彼女の友達に聞いても、さあ、と答えるしかないようだった。

彼女は、職員室に用事がある時も黙って行ってしまうらしい。でも、そういう時はお弁当をきちんとそこで食べて、ふらっと出て行っているようだ。

けれど、最近が違う。

そういえば、最近一緒に食べないね、と、何気ないことのように友達達は呟いた。

彼女のいない世界。

ふっと、ぼくは思う。

そこは、あの空気のような、どこか憂いを秘めた彼女がいない世界だった。

ぼくは、急に怖くなった。

彼女の友達にお礼を言って、廊下を出る。

廊下に出た瞬間、ぼくの世界に音が消えた。

偶然だろうが、その廊下には誰もいなくて、つい焦燥もあり、ぼくは立ち止った。

そして、歩むべき場所に体を向けると、闇を見つけてしまった。

彼女が、懸命に見ていた、あの闇。

暗闇が、ぼくに手招きした気がした。

瞬間、ぼくははじかれたように走りだし、闇を通り過ぎる。

彼女を、早く探さなければ。

独りでいることにはもう、慣れた。

私は、思いのゆくまま歩を進める。

闇を追いかけていた。

そうしたらいつの間にか校舎の外に出て、坂道をのぼって、今は使われていない、寂れた寮にやってきていた。

じめじめした空気と、勝手にのびる雑草。

建物の窓は割れて、その中は、闇。

私は、肌にまとわりつくような風に背中を押されて、その真っ暗闇に足を踏み出した。

闇が、そこかしこでぼくを誘う。

笑うように、泣いたように、なにもないようで、嘲笑うようで。

ぼくは焦っていらついで、とにかく闇を追い払うように追いかけた。

ぼくが闇を追いかけると、闇はすうっと、ぼくから遠ざかる。

逃げているような、こっちにおいでと言っているような。

けれど、この闇を彼女が追いかけたのは確かだ。

彼女は、この闇にのまれようとしている。

彼女のいない世界が、完成しつつあるのだ。

それを、誰も気づいてはくれない。

そして、ぼくが気づいた。

ぼくが、見つけた。

寮に足を踏み入れると、そこはうつすらと明るくて、影がそこかしこに、強く、ときに弱く存在していた。

けれど、私の求める闇は見当たらない。

もう少し奥に進むと、なにもない、広い部屋に出た。

そこはやつとのことで機能している、ぼろぼろのカーテンが全てを闇に包んでいた。

一番奥に、何かがぞわぞわと動いていることを感じた。

私は、一歩踏み出す。

ぞわぞわぞわ。

動く、蠢いている。

私を誘って、手を揺らして。

私は、その真っ暗闇を懸命に見つめた。

追求めた世界が、そこにある。

ここにきて、はじめて気づく。

私が、いない存在だった、って。

視界が滲む。

どうにかして、どうにかして私が生きていくための居場所を探していた。

盲目なまま。

けれど、あの闇に魅入られた日から、私の真っ黒な瞳は開いて、居場所を見つけた。

そこは、なにもない。誰とも、何とも繋がりのない、暗闇。

黒く黒く、たまに動く、闇。

その中が、私の居場所だと知る。

それから少しずつごく客観的な目で自分を見るようになって、自

分が自分ではないように思えて、自分さえも怖がるようになって、自分さえも貶すようになった。

私なんか、死んだっていい。

一歩ずつ、希望の暗闇へと踏み出していく。

一歩、一歩に蛇が絡みついているような重さを感じた。

けれど、私は向かう。

たった独りで向かう。

少しずつ私の感情がぼろぼろと抜け落ちていく気がした。

走馬灯だって見える。

けれど、私の感情には嬉しさなんかなくて、泣き笑いなんてなくて、ただ悲しみだけがぼろぼろとおちていく。

それは、滴のような、頬を伝わっていたような。

頭の中で巡る走馬灯だって、いつでも私は独りでいて。

価値のない、人生なのだ。

意味のない、人生なのだ。

私は、ふわふわ、ぐるぐるした気分で、闇の目の前に立つ。

闇が、ふわりと笑った気がした。

私が、その笑顔に触れようとしたとき。

「だめだ！」

ぼくは叫んだ。

暗闇が逃げて行った古い建物の中に入って、ただ闇が濃い場所へ走った。

そうしたら、広い部屋にでて、そこには彼女が立っていた。

今まさに闇に触れそうになって、ぼくは思わず叫んだ。

けれど彼女は驚いた様子もなく、まるで幽霊みたいにふわっと、こちらを向いた。

「……」

彼女は口をつぐんでいる。

表情は、無だった。

なにも思っていないようだった。

ぼくは、まるで冷たい氷を首筋に押しつけられたような気分になって、いつきに体が冷え切った。

「だめだ」

やっとのことで出た言葉は、それだけだった。

彼女は、闇を背後に、ただ立っている。

気高いあの強い瞳はおぼろげで、闇に魅入られたように、真っ暗なまま。

ぼくが一步踏み出すと、彼女の背後の闇が彼女を優しく包む。

彼女は、くすぐったそうに瞳を細めた。

まるで、小さな子供が母親に優しく抱かれた時の様。

ぼくは、それ以上近づけなくて、一生懸命思考した。

彼女を、あの闇に渡してはいけない。

「行っってはだめだ」

「……どうして？」

低い、声だった。

怒っているような、けれど、彼女の表情は何もない。仮面をかぶっているようだ、と思った。

「私がこれを望んでいるのに？」

今度は軽く弾むように。

「消えてはいけない。君がいない世界なんて、作ってはいけない」

「何がいけないというの？ 一体誰が？ 誰も、私を見てはくれないというのに」

歌うように。

「ぼくが、しっかり見ていたよ。闇を一生懸命見つめていた君を、けれどどこか決心をしたような、気高い君も」

「そんな私はもういない。私はもう、死んでしまった」
空虚なように。

「君はまだ死んではいない。これからがあるんだ」

「これから。誰もいない世界で、私にこれからなんかない。未来なんてない。過去だってほら、私独り」
嘲笑うように。

この世界を、嘲笑うように。

「……君のことに気付いていない世界は、ここで終わりだ」

「私が存在していた世界が、ここで終わるの」
闇が、いっそう強くなる。

彼女の頬が、暗く陰る。

「やっと、終わってくれるのよ」
哀願するように。

彼女は、気付くと泣いていた。

「私がどれほど辛い思いをしていたか、あなたは知らないの。私がいくら叫んだって、誰も気づいてはくれない。私は呪いをかけられたのよ。シンデレラのような、幸福な魔法でも、白雪姫のような、綺麗な魔法でもない。私には、ただ恐ろしい呪いしかかけられなかった。ここに私は存在しているのに、どこか存在していないような。私がここに生きている証拠を、軌跡を、確かめられないようなそんな呪い。私の世界には誰もいない。誰もいない世界なんて、在る意味がない。私には、もう、なにも、ない」

小さな子供のように、彼女はぼろぼろと泣いた。
闇が、慰めるように彼女を黒く染める。

ぼくは、彼女のもとに歩きだす。

きみは、寂しいんだね。

そんな、優しい気持ちを抱えながら。

「君の世界はたった独りなんかじゃない。ぼくが居たよ。ぼくがそっと遠くで見つめていた。けれど、今度からは君の隣に居よう。きみが笑った時、その声が聞こえるように。きみが嬉しい時、その出来事を喜べるように。きみが、

きみが泣いた時、その涙を拭えるように」

目の前に、彼女の崩れそうな体がある。
ぼくらは正面合わせ。

そこに彼女がいて、ぼくがここにいる。

「ここに君が居て、傍にぼくがいる」

彼女は、それを聞くと、本当に、はじめて本当に表情を動かした。
それはとても、至福の顔で。

そうして、そうっと、大事な何かを食むように、唇が開く。

「もっと、もっと過去に、気付ければ良かったのにね」

冗談交じりで、彼女は笑って、

そうして、彼女は、

闇に、のまれ、

そして、

世界は、ぼく一人になった。

(後書き)

久しぶりの雨でうじうじしてなんだか沈んでふいに思い浮かんだお話。

どうしようもなく救えないからこそ、今を精一杯、泣きながらも生きていきたいと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6689n/>

闇に吞まれゆく、君の世界

2010年10月9日23時41分発行